

冬の歌

1

うすら日の中で かすかに うごめいてみた 虫
いつか 息も たえだえの姿
天候に 左右された これまでの いのち
いつまでも いちめつくされようとする ひとつの虫
私は やがて 立去ると
小川の ほとりに一本の落葉松が にごえて 立つてゐる側に来る
せせらぎは さびしく つめたく
私は 聞きながら うすら日を 仰ぎ見た
私は こひ人が ほしい
やさしく 息を通はす ひとりのひとに 逢ひたい
さうしないと 虫に 似て
私は いつまでも 哀れな生涯を 送らなければならない
空と せせらぎに かこまれて
私は いつまでも なげかなくては ならない

2

散り残りの 木の葉に かざられた 木立の中へ
歩み入ると 空は いよいよ 澄んで 見えた
つめたい 光に 幹は ひかり
私は ころろで いのつてみた
たくさんの人に 愛されるやうに
さうして 私が 純真なやうに
しかし 私の わるいところは そこでも ここでも 木立の中へ
飛び出して 行つては あばれまはつた
人を きづつけたやうに 木を折りちらし
空が きづだらけになる程に 木立をみだし
私が どうしても 泣き出すやうに しむけて 途方に くれさせた
人が 私を にくんだやうに
散りかかる 木の葉は 散りながら ひとひらごとに 怨みをつぶやいてみた

3

空に ゆつたりと 白い雲が 夢みるやうな そぶりを して
ひらひら 黒い 小さな鳥が そのまはりを めぐつて ゐる
これが 春で あつたなら 世界を乱す気も するのだが

地上に つめたい風は 吹き 木立は 枯れて しまつてゐる
すべてを 鳥と 雲に まかせて
みねむりを するのが いちばん いい
私の ねがひは 愛であつた 女の人と 腕を組んで 木立を 歩む事であつた
風も吹かない 鳥も飛ばない しづかな 暮しの中を
私たちだけが はなやかに 笑つてすぎるやうな そんなやうな
私は それを 夢みるために かうして ベンチで 雲を見てゐる